

開館六十五周年記念寄稿

碌山美術館の発展と共に 荻原義重（生家当主）

物心が付く頃から、我家には母屋から渡り廊下で繋がっている画室（碌山館）に白い物体があることが気になっていた。それが後に荻原碌山の作品であると知るには時間が掛かった。小学生の頃、週末になると何人かがやって来て話し合いや写真撮影が行われた。家中に響くような声も聞かれた。母、叔母や姉達のカレーライスを振舞う光景も見られた。これらの事は碌山研究が発展し、やがて碌山美術館建設に繋がっていたとは、知る由もなかった。

しかし、昭和三十三年現穂高東中学校の脇に碌山美術館が建設され、碌山の命日に開館の運びになった。このころになると、我家で生まれた祖父の弟守衛（碌山）は偉大な芸術家だということが分かってきた。それを象徴する出来事が三年後の三十六年の三月に起きた。本館と植樹した木々に支え棒があるのみの館に、結婚されたばかりの皇太子ご夫妻（現上皇ご夫妻）が訪問されたことだった。既に碌山の芸術性を高く評価された結果だと思う。美智子妃殿下が撮影ポーズを取って下さったことが印象に残っている。

昭和四十二年《女》が重要文化財に指定された。それに伴ったのか、生家を県指定の史跡にしたいという申し出があった。思案した結果、三年後の四十五年三月、申し出を受諾したが、二週間後土蔵を残してすべて焼失してしまった。大変残念だったが、彼の作品等はほとんど館へ寄贈してあったので助かったが、幻の史跡となった。

やがて民放で「パンとあこがれ」やNHKの朝ドラで「水色の時」が放映され、一気に来館する人が増え、ツアーバスが引つ切り無しにやって来た。一時は年間約三十万人に迫る勢いになった。館内に入りきれない状態も出たという。そして蓄えた資金を基に隣地を購入し、第一展示棟、事務棟、第二展示棟、最終は収蔵庫を備えた杜江館ができ、美術館の形が整った。何と約五十年の歳月がかかったが、他の美術館には無い特色ある館運営だと思っている。それは入館料だけで運営が出来ていることだ。そして、多くの方々がボランティアで館を支えることや、心温まるサポーターからの支援金があるからだと思う。その一例が、一昨年碌山館の雨漏り修理のためのクラウドファンディングを立ち上げた時、予想を超える多額の寄付金が集まった。コメントの中には「安曇野のシンボルとしてこれからも末永く館が存在して欲しい」「是非また行つて見たい」等励ましの言葉があった。

数年前に正面入口にあった梅の木が枯れた。その木は美術館建設の時、我家の幼木を植えたものだ。よく六十年以上生き抜いたと思っている。また、館内にある桜の木は、私が三十五年三月穂高中学校を卒業する時、卒業生全員で植えた木の一部だが、数本が枯れた。しかし、脇芽が出てきて伸びている。きつと数年後には花を咲かせてくれるだろう。このように館内には思い出の樹木が所狭しと生えているが、六十五年の歳月で大きくなり、秋になると紅葉し、訪れる方々を喜ばせている。私はこの時期落ち葉掃きをすることが何より好きだ。亡き叔母も美術館へ出かけ、草花の手入れをしていた。

どうか碌山美術館は、開館百年に向け、来館者の心が癒される異空間の場所で、安曇野のシンボルとしてあり続けることを切に願っている。

笹村草家人先生 佐藤和子（元石井教室生）

幾多の出来事の中、碌山美術館が、昨年目出度く開館六十五周年を迎える運びとなりましたのは、ひとえに碌山とその彫刻を愛する心ある老若男女、多くの先人の方々の働きに依るものでありますが、戦後間もない時代の其の創設に当たっては、笹村草家人先生の強い意志力なくしては到底成し遂げられなかったのではないかと思います。勿論、其の支えには、恩師・石井鶴三先生が居られました。

未だ明治の色濃い東京で、士族の家に生を受けた事を矜持として他をものともせず、時として児童とも見える愛すべき行動をほしきままにする、希有なパーソナリティーの持ち主であった彫刻家・笹村草家人先生。其の一挙手一投足に恐れおののいて居た若き日の我が身を懐かしく思い返す今日此の頃でございます。

美術館との思い出 関 昭子（関清秀夫人）

今から約六十年前穂高中学校のプールを作ったことがきっかけとなり、碌山館の建設に尽力してくださった笹村草家人さんと主人は話をするようになりました。そのうちに手を貸して欲しい時は「関君、呼びたまえ」とのことで、いろいろお手伝いをしに美術館へ駆けつけて行きました。

碌山館の暖炉の熱が上に行くから前に行くようにして直して欲しいと言われたのが最初の仕事でした。その後碌山館の入口近くにあるコンクリートのベンチ、小さなテーブル、庭と樹木の境にある瓢箪型の杭も作りました。コンクリート製の杭を作った時はお若い時の柳沢先生にもお手伝いいただきました。さらに庭にモチの木とシヤクナゲを植えました。今もこれらのベンチ、テーブル、杭は碌山館の庭で入館者の皆さまを楽ませてしていると聞いています。

先生からの電話で木曾の南木曾町よなか読書で水害があり、当時の校長先生のお子さんも亡くなっていたため、慰霊碑として《悲しめる乙女の像（蛇抜きの碑）》の制作を手伝って欲しいと図面をいただき、現地の大きな岩の上に型枠を組んでコンクリートで作りました。先頃南木曾町まで見に行った時この像が寂しそうに立っていました。つづいて松本市の源池小学校にいつも水が流れている池を作れと言われ、かっぱ池を作りました。今はもう道路の関係でなくなっていました。

その後渋沢敬三さんのお宅の庭の設計をするようにと言われ、庭の大きさなどの説明を受けてから、その庭の設計をして図面を渡しました。この時は笹村先生から水墨画の掛け軸をいただきました。渋沢さんの家の仕事を最後に笹村先生と美術館と主人の関係は、主人の突然の事故死により六年間で終わりました。

美術館で花の種をグズベリーハウスに置くことになり、駐車場の横の畑をお借りし、女性六人も花を育てて種を取ることになりました。いろいろな花を育てたあいまにミニトマトを作り、そばを作ったり、スイカも作りました。

種は乾燥させてビニールの小袋に入れ、グズベリーハウスに置きました。畑を返してからは、皆それぞれの家の庭で花を育てて、種を持ってきました。私も家でフウセンカズラ、朝顔、ポピー、サルビアなどを育て、種を取りグズベリーハウスに持って行きました。花の種を美術館にお願いになったお客様に、よく買っていただきました。

五十嵐さんから杜江館の椅子に置く座布団を作ってほしいと言われ、種を作る皆さんと二十枚の座布団を作りました。

館で行事のある時は声をかけていただき、毎年の友の会旅行にも参加して、何ヶ所もの美術館に行き、友の会の皆さんともお話しすることができ、美術のことを知らなかった私ですが、とても良い勉強をさせてい

いただきました。

拓衛おじさんのこと等 中村石浄（次郎）（元穂高中学校教師）

「碌山美術館にた。だ。も。で。な。い。男。が。い。る。」と私を連れて行ったのは、時の穂高中学校長の腰原利由校長であった。昭和四十七年の春浅き日のことです。「人は見掛けで見えてはいけないぞ」と校長は本館のドアを押すと受付に座っている男が見えました。丸坊主頭で肘をついてこちらに顔を向けたその人が横山拓衛さんでした（図1）。栗皮を剥いだような風貌で牛のようなやさしい目つきで私を迎えてくれました。

校長は早口で拓衛さんがどうしてここに居るのか、何がた。だ。も。で。な。い。の。か。話。し。て。く。れ。ま。し。た。が、そんなことはどうでもいいことでした。

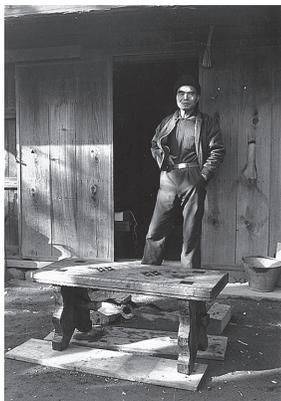


図1 深山軒前の横山

兎に角この辺から交流が始まり、時々馬を引いて山から木を出す苦労など話してくれました。「車はタイヤを換えりゃ動くが馬はそうはいかね！」と何時も呟くことが多かったです。雨の続く日は袖小屋で過ごしたが、そんな時チラシの裏に民話を書いてみたこともあると話してくれました。その一つが「なまくら観音」の民話であり、真にこの物語は拓衛本人を裏打ちしたのではないかと思うのです。実はこの「なまくら観音」が世に出るにはきっかけがあったのです。それは笹村先生にこの原稿を見せたら、先生は大変感心して冊子にして館において百円ももらえば小遣いになるからなんてこともありました。拓衛さんは初めから正規の職員ではありませんでしたから笹村先生も気を遣ってくれたのです。

美術館建設の準備は昭和三十年頃から始まったと思いますが、この指導に当たった笹村先生が横沢先生に地元の人で仕事を手伝う人はいないか相談したところ、横山さんが登場した訳です。笹村先生の要望に応じて木材を用意したり、石を運んだりして、意気投合していくのです。横山さんにとっても人生の支えとなっていくのです。

兎に角当時の美術館の佇まいに合った存在でした。とりわけ深山軒（図2）を背にして机を造っている姿は来館者の目を楽しました。

そもそも深山軒の由来は萩原守衛が東京に出た時明治女学校の裏庭に宿として建ててもらった小屋の名前で、笹村先生が木曾の山から移設した水車小屋です。移設された当時笹村先生の計らいで彫刻家江崎実、園子夫妻の新婚生活を支えた小屋でもありました。



図2 深山軒

美術館の庭の清掃は中学生でやっていましたから横山さんからも指導というかアメやラーメンを頂いて不良の子も良い子になりました。汲取式のトイレはいつもきれいになっていました。

それにつけても笹村先生は厳しいというか困ったことも沢山あったと思います。子供達が川から運んだ石をこれはダメだこれはよしと区別したり、東京から長電話をしたり、校長も前田教頭も苦労されたと思います。ある夕方突然電話があり「中村、誰か血圧を測る看護婦を連れてきてくれ」との、困った腰原先生の声。何故かという「夕食を前にして血圧を測らないと食べられない」と言っているから……。やっと本郷村の看護婦をお願いして「枇杷の湯」へ飛んでもらったこともありましたが、奇しくも昭和五十年九月二十六日に先生は亡くなりました。

その追悼式を穂高中学校の体育館で行うことになり、その準備が大変でした。PTAの役員の方も総動員で夜遅くまで清掃をやっていました。式典の間際になって東京から会場設営の偉い先生方がみえ、式典は簡素で芸術的でなくてはならぬと、式台を白菊で被い弔問者と一体となる空間を作るということで、花だけでも何千本も用意することになり、花屋の小林功さんも大変苦労されたことと覚えています。

明けて五十二年の一月二十五日に横山拓衛さんは深山軒で急死されました。雪の深い朝でした。それから時は流れ平成九年に横山家自宅玄関前に拓衛を偲ぶ記念碑が建立されました。長男の正身、美智子夫妻に見守られています。

草家人先生が逝かれてから拓衛さんは放心したように元気が無くなり、淋しい後ろ姿を見かけるようになりました。それでも信念はぶれませんでした。秋のある日、「中村さん、俺を広津の山へ連れて行っておくれや」と、手には線香と花を持っていました。民話「なまくら観音」の原点となった片腕の無い観音様へのお参りでした。年に一回程度お参りに行っていたのですが、これが最後となりました。

青空や、まことやな、

土塁の丘や、亡びしものは

ことごとく、土にひそみて

鶺鴒は声なく歩み

草の穂に秋の風吹く(三好達治)

あの頃と言っても美術館が発足して二十年、昭和五十年にNHKの朝ドラ「水色の時」が放映されると観光バスが押しかけ、庭は人で埋まり、オバサン達は木炭デッサンを見て「でかいでかい」と奇声をあげた。兎に角人が動いた時だから学校でも楽しいことがあった。事務職の浅川とみ子さんが芸大の基俊太郎先生の彫塑制作のモデルになった。浅川さん

はスキーマの達人で国体の選手にもなった人で体格が美しいから格好であった。題も《スキーマ》となった。入館者が多いことに越したことはないが、美術館は単なる観光地ではない。特に碌山美術館は作品にふれて、人として真実に生きることの厳しさと美しさを学ぶ道場でもあると思います。

深山軒、江崎先生、横山さんのこと 小林 功(参予)

碌山は明治女学校の敷地の片隅に小屋を作らせてもらい、それを深山軒と称して住んでいたと聞いています。碌山美術館にも、昭和三十三年四月の開館当初から木曾の水車小屋を移築した深山軒がありました。大きさは三〇四坪、木曾地方の伝統的な作りで、手を上げれば軒先に手が届くような屋根の低さでした。屋根には、白樺の樹皮を裏側にして風に飛ばされないように、その上に平らな石を敷き詰めてありました。樹皮は五十年はもつと聞いていました。この名残りが今のグズベリーハウスです。

昭和三十五年から三十六年頃、この深山軒に江崎実先生が、奥さん(旧姓田島園子)と住むようになりました。山羊小屋もあり、勿論乳の出る山羊もいました。先生は中学で教鞭を取りながら、休日には、美術館の雑用をしながら、深山軒の南側で、石で女のトルソを彫っていました(砂岩で四十〇五十cm)。私はその頃切花のカーネーションの栽培と育苗も手掛けていましたか、なかなか思ったものができず、また心の悩み多き青春時代、よく先生をここに訪ね、話を聞いていただいたり、また多くの教えをいただきました。

江崎先生ご夫妻がここに住まなくなつてからは、庭の木の植栽や赤砂敷きのボランティア活動の打ち合わせ、美術館の少人数の会合などの会場となりました。冬には、こたつにあたりながら、ささやかなパ

ティーを楽しむこともありましたが。当時、深山軒の前にはコンクリートで作った十字型のベンチがありその中央に白いパラソルを立てての茶会を開くこともあり、その席に笹村先生、川上包人先生、中島亀孝先生、当時の理事の先生方がおられることもありましたが。また深山軒を会場に、笹村先生が講師で難解なヒルティの『幸福論』を読む無名会の催しが開かれることもあり、私は入口で寒さに震えながら早く終わるのを待っていました。

中学の冬休みに穂高中学校の図画工作の教室を借りて裸体のデッサン講習会を開催したこともありましたが。横田修英さんを講師に、東京から女性のモデルを招き、外から中が見えないように暗幕を張り、ストーブをガンガン焚きながら。講習が終わると横田さんは深山軒に来ていました。江崎さん、等々力和子さんもおおり、お酒もありましたが、あまり語らず。一日の緊張をほぐしていたのでしょう。深山軒はこのように人をほっとさせる場所でもありました。

これからは横山拓衛さんについてお話しします。私、実は小さい頃、横山さんにすでに会っていました。小学校二、三年の頃（昭和二十二年〜二十三年頃）、学校の帰り道、横山さんの引く荷馬車の後ろの隙間にそっと飛び乗っては「らくちん」をしていました。そのうち、横山さんに見つかって怒られたものです。横山さんは、眉毛が濃く、頑固そうな強面だったからしつかりと覚えていています。

次に会ったのは、この時から十数年経ち、時代は車社会になりつつある、昭和三十七〜三十八年頃、深山軒でした。横山さんこの時はすでに荷馬車での仕事はしていなかったように思います。この十数年の間、横山さんにどんな葛藤があったかは知る由もありませんが、昔のあの強面は消えていました。車社会にはそっぽを向いた、独特な個性を持った、白井吉見さんの言う自由人になっていたように思います。

こんな横山さんの人柄に多くのファンがリピーターとして生まれたいように思います。その中には、ジャーナリストで評論家の草柳大蔵さんがいました。スコッチウイスキーを持って、よく横山さんを訪ねていました。娘さんも来ていたように思います。女優では宇津宮雅代さんもその一人でした。横山さんは田舎料理が得意でしたから、芋汁を美味しく作ってあげていました。食後はほのあたりをかいていたことを思い出します。園マリさんそっくりさんもよく横山さんを訪ねていました。本物かどうかは？です。横山さんに惚れ込んだ人にもう一人白井吉見さんがいました。長編小説『安曇野』の最後に、横山さんが登場するのもその証ではないかと思っています。

横山さんはキノコにも大変詳しく、よくキノコ料理を作ってくれました。覚えてるのは「アカリコ」というキノコです。梅雨明けの蒸し暑い七月中下旬、有明豊里の赤松林に自転車で行ってくれました。私がこのキノコを最初に見た時は、赤黄色で、大人の手を広げたくらいの大きさで、とても食べられるように思いませんでした。ところがこのキノコこと脂身の多い鶏肉を煮るとそのおいしさは、香りは別として、松茸やシメジどころではなく、食感と味の良さではこれ以上のものに私は今まで出会えていません。その後このキノコとの出会いもなく、私には幻のキノコになってしまいました。

横山さん作の童話に「なまくら観音」があります。笹村先生が掘り起こしてくれて東京で公演されたことがあります。池田町陸郷広津にモデルとなった、なまくら観音の石像があります（図3）。

横山さんは手先が器用で、美術館の土産用に木笛やくるみ割り、他に美術館の備品としてテーブルや椅子も作っていました。グズベリーハウスが出来てからは、このハウスの片隅にある古いオルガンをよく弾いていました。スズキメソッドの生徒たちも横山さんを慕ってよく見えて、

チェロやバイオリンを弾いていました。テーブルの上には少しばかりのライブレットとテーブルワインがあり、薄暗い中での音楽（バロック調）とささやかな夕餉は、今思うと本当に懐かしく、輝いて見えます。

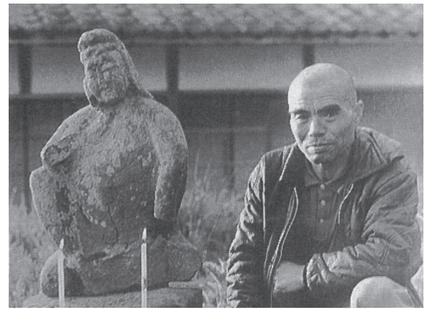


図3 なまくら観音と横山

碌山美術館の思い出 基 俊子（元顧問基俊太郎夫人）

昭和五十七年八月一日の新館落成記念披露の席で当時の所四出男館長をはじめ横澤正彦前館長、荻原孝子副館長、大倉源一郎理事長などの方々に交じり私が写っている写真が手元にあります。その後も度々お目にかかったなつかしい皆様です。

この頃、夫・基俊太郎は足繁く穂高に通っておりました。美術館は運営の充実を目指して館内の環境整備を図ろうとする途上でありました。それには敷地の拡充、学芸部門の補充、作品の収蔵交渉、企画展の開催、第二展示棟建設計画等々、様々な会議が行なわれていました。年に数回夫に同行した私は会議が行なわれている間は入館者に混じって作品の鑑賞をし、館内や庭の活気に満ちた空間の空気を満喫しました。又穂高の町を散策するのも楽しみでした。

美術館は東京から距離的には遠方ですが、感覚的に「ちょっと其処まで」という気分でした。

「碌山美術館は地方にあるがその水準は中央のものです」と俊太郎は

語っております。

現在は科学技術による機械文明が到達点となって社会は激しい変貌を呈しています。

美術の分野にもその反映が及びつつある中で、「日本近代彫刻の正統の系譜」に連なる作家達の顕彰と普及に努める路線を貫かれて開館六十五周年を迎えた美術館が今ここに在ることは、長年にわたって携われて来られた多くの方々の高い志とご尽力の賜物と改めて思います。

ザ・ビッグデー 酒井 良（評議員）

碌山館に初めて行った日の思い出は両親の笑顔と重なる。その日の両親は陽気だった。私も釣られてはしゃぎまわった。

目的地に着くと両親の口から歓声が上がった。《労働者》が目に見え込んで来た。私にとっては生まれて初めて見た彫刻になる。

横にあるレンガ造りの建物は扉が閉まっていた。両親はどんどん進んで行ったが、私はちよつとためらった。入ってみるととても静かで、子供心にも厳かで神聖な場所に来ているという気持ちになった。帰りは不思議なことに、美術館を出て踏切の手前まで戻った事は覚えているが、そこから先の事は全く記憶に無い。七歳だった。

中学生になって初めて学校に行った日も変だった。学校に着いてほつとした瞬間、あの建物がせまって来た。なんで学校の中に碌山館があるのか理解できず戸惑った。案内されて入った美術室も変だった。学校の美術室なのに碌山の作品の写真がずらりと飾られていた。これはいったい何なんだろうと思った。

小さい頃から美術は好きだったけれど、中学校で出会った美術の先生との出会いは運命的なものとも感じている。彫刻の魅力をこれほど楽しく教えてくれる人は今までいなかった。美術がどんどん楽しくなり、

碌山館にも先生と一緒に何度も行った。

高校生になってから石井鶴三、笹村草家人両先生にお目にかかる機会があった。中学時代の先生の誘いのおかげで実現した。お二人は碌山館建設の中心的存在の方であるから、それだけで緊張したが、裸婦デッサンと塑造制作の場での対面だったからなおさら緊張感いっぱいだったが、両先生にお会いできた事が自分の気持ちの支えにもなり、美術大学受験を決めた。一番多く、一番身近かに見て来た碌山の作品の印象に近い人から教わりたいたいと思ひ、大学を決めた。大学の雰囲気は碌山館の付属館建設現場の、わくわくし、ざわざわし、毎日が楽しかった様子に似ていた。石膏取りの授業で、先生の手際の良さにびっくりし、きちんと覚える必要を感じ、アルバイトに行った。初日は曲がったハリガネをのぼす作業を一日中やった。めげずに通っていると、作家のアトリエに連れて行ってもらった。最初に本郷新のアトリエ。《わだつみのこえ》の原形が真っ先に目に飛び込んで来た。ロタン風、ブルデル風、いろいろあったが、数の多さに驚いた。驚いたのは、先生が、石膏取りは私がやるから君は作品をよく見て帰るなさいと言ってくださった事。柳原義達、佐藤忠良、桜井祐一等人ものアトリエに連れて行っていただき、何か気がついた事はあるかと聞かれたので感想を言うと、嬉しそうにうなずき、頑張れよと言っていた。

入学早々、私は日本の代表的作家のアトリエ巡りをさせていた。視界が開けるのが解った。そして気がついた。碌山館を心の支えにしようとの時決めた。

碌山美術館とのつながり 広瀬敏行（友の会副会長）

私は、萩原守衛（碌山）を中学生の時に知りました。テレビドラマ「パンとあこがれ」で、新宿中村屋の創業者である相馬愛蔵・黒光夫妻

の物語の中で、碌山が登場しました。

私は、ドラマに夢中になり中村屋のことを知りたくなって手紙を書きました。すると中村屋から『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』という本が届きました。その本には碌山の作品が掲載されていて、とても心に残りいつか碌山美術館に行きたいと願うようになりました。

初めて碌山美術館に行くことが出来たのは、二十一才の時、昭和五十一年三月でした。穂高駅を降りた時の気持ちは今でも忘れられません。ここに碌山美術館があるんだ、碌山の彫刻が実際に見られるのだと、とても興奮したことを覚えています。

美術館に入ると作品が並んでいて、どのように鑑賞するのか全くわからなかったのですが、ただそこに居るだけで幸せでした。その時美術館には私一人しかいなくて、私が見ているというより碌山の作品から私が見られているという気持ちになりました。作品から言葉をかけられているような思いになりました。《文覚》から、何でここに来たんだと怒られたように言われ、《北條虎吉像》からは、よくここに来たねとやさしく言われたように思いました。当時は、碌山館の中に受付があり丁寧な対応を受けました。心が落ち着いた第一回目の美術館への旅となり、その後年一回は美術館を訪ねて励まされることとなる始まりとなりました。

ある年に美術館と密接になる出来事がありました。企画展の開催中に、巡視ボランティアをする募集がありました。今までの来館者という立場ではなく、美術館側からとして係ることになった事です。巡視の主な仕事は展示室の隅で来館者を見守ることですが、初めてのことであり緊張しました。新鮮な経験であったことと、展示作品をじっくり鑑賞出来たことが嬉しかったです。その後、ボランティアには複数回参加させていただき、館長及び美術館の方々と並びに参加者の皆様との交流が貴重な財産となりました。ボランティア中の思い出として、休憩時間に碌

山の姪である荻原孝子様にお会いしお話しすることが出来て、とても感激したことを覚えています。このような美術館とのつながりは、碌山忌や友の会研修旅行等の手伝いでもありました。これからも、微力ながら友の会活動を通して美術館と係っていきたいと願っております。ここで碌山美術館報の思い出を一つ書きます。凶らずも館報第一号に私の拙い手紙が載ったことです。碌山生誕百年の記念会の感想でしたが、これも嬉しいことでした。

碌山美術館の六十五年の間には、いろいろな苦労があったかと思いますが、これからも美術館を支える皆様で、必ず乗り越えて行くことが出来ると信じています。碌山美術館の弥栄をお祈りいたします。

忘れえぬ方々 所 賛太（元館長、元代表理事）

私は今年で傘寿を迎えます。碌山美術館と関らせていただいたなかで、多くの方々との交わりやさまざまな経験から充実した後半を送ることができ、大変感謝しています。

館長をしていた父が昭和六十二年に事故に遭い療養していた頃、評議員（現審議委員）を拝命しました。当時は父との連絡係くらいに深く考えもせずお受けしました。その後、仁科惇先生中心に、碌山についての冊子を再編集し、カラー図版を取り入れ、平易な文章に書き改めた『愛と美に生きる』の編集委員を拝命、そしていつの間にか理事になっていました。何で私が？という思いを抱きながらなんとか理事を務め、教職三十八年の任期を終えると、館長を拝命し、嫌だ嫌だと思いつながら、何の主体性もないまま務めることになりました。

館長の初仕事は数年前から周到に準備されていた企画展『斎藤与里展―優彩の風物詩―』でした。この企画展を通し、私のふらついていた気持ちには雲散霧消し、この美術館のために生きたいと心から思うようにな

りました。館長、代表理事を務めた二十年間を振り返ってみると、辛いこともたくさんありましたが、いろいろな方々と信頼に満ちた楽しい仕事だったと今では満足しています。

力のない私をいつも勇気づけ励まし、後押ししてくれたのは早逝した、当時は理事で後に館長になった五十嵐さんでした。忘れられないのは、ある春の朝の庭掃除の時、館庭に桜の花びらが散って「こんなきれいな桜の絨毯を掃いてしまうのはもったいない」とつぶやくと「花びらはしばらくすると萎びて醜くなります。その前に掃き清めホウキ目をつけ、その上に散った花びらが美しい。それが当美術館のおもてなしの心です」と言われ、まさに目から鱗でした。短い言葉でしたが、碌山美術館の真髄を教えてくださいました。そして「日常何をするにも、美術館を理想の形にすることを考えているといいアイデアが閃きます」と言われ、この人にはかなわないと頭の下がる思いでした。私より歳は下でしたが、心から尊敬でき、私の生き方考え方を大きく変えてくれた方でした。それまでの碌山美術館の精神的な礎であった故基俊太郎顧問の薫陶を受け、真の継承者でもありました。

榊原好恭さんは友の会会長や理事を務めた方です。都市銀行を早めに退き安曇野に移住し、碌山に魅了され、国会図書館にまで出向いたり、インターネットを駆使して、碌山研究を究めました。東京などの碌山ゆかりの地のウォーキングに何度も連れていただきましたが、その際の詳しく巧みな解説に、まるで明治時代を歩いているような錯覚さえ覚えました。碌山の日記「つくまのなべ」に新注釈を付した微に入り細に穿った研究を『碌山美術館報』に十回にわたり発表され、若き荻原守衛の生活や思考などについて伝えていただきました。その真摯な研究態度は学者そのものでした。

お二人をはじめとするたくさんの方々に囲まれながら碌山美術館に関

われたことはどれだけ私の人生を豊かに幸福にしたかわかりません。関係者の中でも私ほどの幸せ者はいないと思っています。

中学校美術教育はどう係われたのか 高野 博（元館長、代表理事）

碌山美術館の開設前、碌山研究の中核は義務教員であった。その関係は今も根底に流れている。そこで私が係わった学校教育における碌山の扱いの変化を、言葉足らずではあるが記そうと思う。

私は昭和三十八年に高校へ進学したが、当時の公立高校入試では全科でペーパーテストが行われた。授業でも色彩の原理や美術の知識が扱われ、問題集までであった。全科でのテストは中学生にとって負担は大きかったが、美術は私にとっては得点を稼ぐ重要な教科でもあった。入学検査でのペーパーテストはその後五教科に削減されたが、削減された四教科の負担軽減分は結果として五教科に吸収されてしまったと思う。テストがあるために学べた造形や美術史に関する知識は、その後大多数の生徒にとっては奈良・京都への修学旅行の事前学習として学ぶ以外に学ぶ機会は無かったと思う。

昭和四十八年から中学校美術科の教師になった。美術は受検教科では無かったが、授業時数は変わらずに各学年週二時間あり、準備や片付けに時間を取られる彫塑の授業も行うことが出来た。また鑑賞の領域では碌山の《女》が教科書の中で大きく扱われていた。教師もまた、石井鶴三の彫塑講習会が発火点となり各郡市で開かれていた彫塑講習会に参加し、制作に携わる者も多かった。

しかし加速度的に発展する科学とグローバル化により教育課程は改訂を重ねていった。新たな学習内容は、既存の活動や学習内容の削減を求めていく。美術では三年生の授業時数が週一・五時間となった。時数減は準備や片付けに時間がかかる題材を排除する。美術教育の在り方も

「感性を育てる」教育に舵を切っていった。碌山については歴史教科書の中で触れられるだけになってしまった。現在の授業時数は中学校一年で年間四十五時間、二・三年では三十五時間に過ぎず、少子化も相まって美術科教員は激減している。そんな中でも碌山美術館は中信旅行などの学校行事の中で重要な位置を占めていたのだが、行事の精選・交通安全全意識の変化により今では碌山美術館を訪れる学校も一部を除いて見られなくなっている。

碌山美術館の発展期、学校教育の中の碌山は、近世の日本近代化におけるトピックとしての扱いに留まっていたが、人々の知識の中に碌山と《女》の名は存在していた。しかし今では碌山美術館は安曇野を表する景観として扱われている。

少し前、東博と東京芸大が3Dによる《女》のミニチュア像を作成・販売したが、今では3Dプリンターにより生身の人物像が造られる時代である。「芸術とは何か」が改めて問われるが、その一つの答えが碌山美術館にはある。喫緊の課題である来館者増のため先ずは一層のエンターテインメント化を図る必要があるが、楽しかった。気持ちよかったという気分の上に「芸術とは何か」碌山の彫刻が持つ魅力を感じることができる仕掛けを作れるかが問われるだろう。

ひとえに日々来館者と接する館員の努力に期待する。